

こんなにあった日本の薬害

これまでに起きた薬害事件を一部紹介します。

1956年 ペニシリンショック
アレルギーによるショック死

1961年 サリドマイド
睡眠薬を妊娠中に服用し、手足や耳に奇形をもったこどもが産まれた。被害児は世界で数千人。日本で約千人。日本では、レント博士（ドイツ）の警告にもかかわらず、その後9カ月間も販売を継続、被害が倍増した。

1965年 アンプル入りかぜ薬
大衆薬で死亡者が多発し発売中止に

1970年 スモン
60年代から下肢の麻痺や視力障害などの末梢神経障害が多発。70年に殺菌剤キノホルムが原因と判明。被害者約1万2000人。1935年には副作用の警告があったのに、整腸剤として大量販売した。

1971年 クロロキン
抗マラリア薬による視力障害。被害者千人以上。

1983年 薬害エイズ
HIV（エイズウイルス）に汚染された血液凝固因子製剤により血友病患者等約1800人がHIVに感染。アメリカでは安全な加熱製剤が83年に実用化されたが、日本では85年まで危険な非加熱製剤が使用され続けたため被害が拡大。

1988年 陣痛促進剤
陣痛促進剤により、母子の死亡や重篤な障害を残す被害が続いた。医療機関に対する危険性の情報伝達が不十分で、安易に計画分娩をすすめたことが原因。

1989年 MMRワクチン
新3種混合ワクチンにより死亡者や重篤な障害が発生

1993年 ソリブジン
抗がん剤との併用で死亡者多数

1996年 薬害ヤコブ病
脳外科手術で使用したドイツ製のヒト乾燥硬膜がプリオンで汚染。100名以上がヤコブ病を発症して、植物状態の後に死亡。アメリカでは87年に輸入を禁止。日本での使用禁止は10年遅れの1997年。

2002年 薬害肝炎
止血目的などで血液凝固因子製剤を投与されC型肝炎に感染した被害者が全国5地裁で提訴。

2002年 薬害イレッサ
肺がん治療薬、発売直後から多数の副作用死。

2006年 薬害タミフル
インフルエンザの治療薬を服用した後、飛び降りなど異常行動や突然死で死亡。2007年、10代の子どもには使用禁止に。

薬害のない明るい未来へ